機友ニュース

（題字は村山五郎氏）

ついに箱根を越えた機友会
母校の一層の発展を祈念して

立命館大学機友会会長　島田泰男

歳末を迎え、機友会会員の皆様には何かとご多忙の中、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃から本会の諸活動に関し、何かとご支援を賜りまして、誠にありがたく厚くお礼申し上げます。

母校・立命館大学では一九九四年四月、新キャンパスへの理工学部拡充移転および衣笠跡地への新学部「政策科学部」設置を中軸とする第四次長期計画が成功裡に推進され、本年四月にはさらに理工学部に「ロボティクス学科」と「光工学科」なる2つの新学科が設置され、十学科からなる一大理工学部が実現致しました。また、産学交流の面でもいくつかの研究センターや「シンクロトロン放射光（SR）センター」の建設など、他に例を見ない独自の大型企画が次々に実現し、まさに21世紀を先取りするような勢いを感ずる次第であります。

母校ではさらに一九九八年四月に経済学部・経営学部をBKCへ移転し、理工学部と有機的に連携した文理融合型の新キャンパスとして新展開をはかることになっており、すでに新校舎の建設が着々と進行しております。また翌年の一九九九年四月には大分県別府市に「立命館アジア太平洋大学（仮称）」を設置することが法人決定しており、諸準備が進められています。

このような本学の第五次長期計画が機械工学科の恩師でもあられる大南正瑛総長の卓越したリーダーシップのもとに成功裡に推進され、母校の社会的評価も一段と高まりますことを、卒業生の一人として校友各位とともに心より念願するものであります。こうした大事業が計画通りに進捗し、社会的評価を得るためには卒業生一人一人の母校に対する愛着と物心両面の支援が望まれます。機友会会員各位による大南総長へのご支援、さらに母校・立命館大学に対するご支援を切に宜しくお願い申しあげます。

ところで、立命館大学機友会では現在、卒業生相互の親睦並びに卒業生と母校の相互支援体制の強化をはかるために、全国規模での支部組織を結成する取り組みが進んでおり、会員各位のご支援により、平成四年九月六日に第一号の支部として「滋賀支部」が設立され、続いて同月十九日には「北陸信越支部」が発足致しました。ひき続き十月三日には「京都支部」、十一月二十八日には「大阪支部」が設立され、平成五年七月二十五日には「東海支部」が、平成六年三月二十七日には「兵庫支部」が発足するとともに、平成七年四月十六日には「奈良和歌山支部」が設立され、さらに平成八年九月十五日には第八番目の支部として「関東支部」が設立されました。いわば、機友会もついに箱根を越えることができたわけで、感慨ひとしおであります。

全国を十三ブロックに分割した支部組織結成計画も順調に進捗し、現在、第九番目の支部として「中国支部」の設立準備が進んでおります。本会は会員総数七千名を越える大組織に成長して参りましたが、上記八支部の会員合計数はほぼ四千五百名にのぼり、会員総数の面からみても文字どおり過半数の支部組織が実現したことになります。各支部設立準備委員の方々をはじめ会員各位の絶大なるご支援に対して、改めて厚くお礼申し上げたく存じます。

最後に、機友会と母校のさらなる発展を祈念して、今後も引き続き会員各位の温かいご支援とご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申しあげますとともに、皆様方の益々のご健勝とご隆盛を衷心よりお祈り申し上げます。

「機友会ニュース」創刊
さらに第二号発行祝して

機械工学科元教員　関護雄

私は元機械科教員で、故藤谷先生等とご一緒に、旧制専門学校から新制大学にかけて、最後は昭和四十九年まで、立命館にお世話になった者です。

立命館理工系は、戦前から衣笠にありまして、と言うより衣笠には理工しかなかったのでして、その後広小路キャンパスから、他の学部が移って来られたのです。そして今度は理工が真先にBKCに出て行ったわけで、そんな経緯を知る人も、もう旧人だけになってしまいそうです。

私は学校を出てすぐに、当時の専門学校に奉職しましたので、今思うと赤面の至りですが若い時から教壇に立っていました。一方立命館では当時色々な事情で、研究活動が不自由でしたので、京都大学の西原研究室にお世話になっていました。たまたま大南正瑛先生とは専門が似ていましたので、一緒に京大西原先生の研究会で勉強したものです。

なお、西原先生は戦前の立命理工の非常勤講師もなさいまして、藤谷先生は実際に講義を受けておられます。藤谷先生は生え抜きの理工育ちの方で、機友会の為には随分ご尽力なさいました。学生の指導にも本当に熱心で、頭の下がる思いです。

さて創刊の「機友会ニュース」に年寄りが寄稿するとすれば、昔話が最適なのですが、機友会では藤谷先生に全部おんぶしていましたので、私の手許に何も資料がありません。そこで私が前に書きました「理工助成の初期の頃」の一部をここに採録します。これは一九八0年発行の「立命館大学理工学部六十五年小史」に掲載されたものです。

以下、本当の昔話で、神話だと思ってお読み下さい。当時、立命館大学理工学部の機械科には備品台帳がありませんでした。勿論、事務室の机、戸棚などには備品番号があったと思いますが、実験機器の備品台帳はなかったのです。私などはまだ若手の末席ながら気持ちだけは張り切っていましたので、僅かながら文部省の科研費をもらって来て、それで備品を買いますと、立命館の備品台帳に載せなければならないのですが、理工学部の事務長さんがその為に新しい備品台帳を起こしてくれたというような時代です。

それでは備品台帳がなくて備品の管理がいい加減であったかと言うとそれが全く逆なのです。大体測定器一抵抗線ひずみ計の出始めという時代一は皆貴重品、今から思えば使い勝手の悪いものを大事に大事に使いましたし、本来、研究室では泥棒の居ない限り物はなくなったりしないものです。帳面上の備品管理の手間が省けて、本来の仕事が進んだとも言えるのです。

かんじんの理科助成の初期の頃の話ですが、理科助成の始まるまでは、我々の実験室には学生の機械工学実験の設備があるだけで、我々教員の研究費はゼロだったのです。ゼロというのは本当にある書類に研究費0とあったのを今でも鮮明に覚えております。

このような時代から今日の発展を見、さらに前途洋々の立命館の将来を祝福してやみません。

話は別ですが、昭和四十五年一月の立命館の職員録が今手許にあります。これによりますと総長末川先生、機械工学科のところには

遠藤先生
大南先生
菅井先生
杉本先生、関
田中先生
福井先生
藤谷先生
村上先生の外、笠井、川辺、山元、大村の各先生のお名前が見えます。もう四半世紀も前の話です。

支部だより

地元にふさわしい 楽しく力強い 「びわこ機友会」をめざして

支部長　山田元助

滋賀支部は着々と基礎固めをしてきましたが、BKCの地元にふさわしい「ユニーク」な活動をめざして努力中です。

県内に理工学部を中心とする新キャンパス完成で予想した通り、会員数は増加傾向にあり、二百九十名で発足した当会は、今もなお、流動的ですが約三百四十名となり、今後更に増加することが予想されます。

平成六年九月、第二回総会の時に、島田会長から滋賀支部旗(第一号)をいただきましたがその意味するものは、機友会全体の一組織として有機的に大きな展開を計ると共に、支部の自主性を尊重し独自の特色を発揮することにあると考えています。

滋賀支部の愛称は「びわこ機友会」で、楽しく力強い「びわこ機友会」が合い言葉であります。

当支部の方針は機友会ニュース第一号でもご紹介した通り、①会員相互□□活向上発展、互恵、親睦 ②地元としての特色ある活動の展開 ③本部並びに各支部相互間の連絡強化 ④母校との各種連携企画の立案、実施でありますが、そのためには健全な財政基盤の確立が必要であります。幸い、既に終身会員が五十名を超え、その基盤が確立されつつあります。

「第三回総会」

平成八年九月一日、BKCで第三回総会が開催されました。当日は、第一回、第二回と司会をお願いして来ました田中武司先生が英国に留学中のため、先般、滋賀県内に転居された酒井達雄先生に司会をお願いしました。当日の役員改選では、現役員全部の留任が決まりました。

会場で、英国から私宅に送られて来た田中先生のFAX「メッセージ」を私が披露させて頂きましたが、満場の大拍手でした。

第二部の講演会では、本学の国際関係学部教授、立命館大学国際平和ミュージアム館長の安斎育郎先生に「超常現象を科学する」という演題で講演をしていただきましたが、誠に時宜を得た素晴らしい内容の講演で、所謂超能力の「スプーン曲げ」の実演を含め、満場の聴衆を魅了しました。びわこ機友会としてはこの講演会を機械工学科大学院生に開放し、自由出席していただきました。

又、当日出席出来なかった会員のために、平成九年発行予定の「びわこ機友会ニュース」第三号に、当日、会場で配布された立命館大学機友会滋賀支部講演資料を転載する予定です。

その概要は、①オウム真理教の意味するもの、②心配な近年オカルト事情、③超能力、心霊現象の社会史、④どう生きるか、でした。

引続き地下保存遺跡(木瓜原遺跡)や大学構内の見学会を行い、第三部の懇親会では安斎先生を中心に美酒を汲み交わし、食事を楽しみ、先生や会員同志の交流を深めました。

会員の中には、いままで「酒に酔う」ことは知っていたが、「話に酔う」ことは始めて経験しましたと安斎先生に申し上げ、先生は苦笑されていました。

「今後の方針」

当支部の活動方針に基づいて成果をあげるために、長期展望の下に、名簿の充実、財政基盤の確立をはかり、「三人寄れば文珠の知恵」を原則に相談しあって、機友会滋賀支部旗の下、楽しく力強い「びわこ機友会」を目指しつつ、地元にふさわしい会にしたいと思っています。皆様の一層のご健勝をお祈りしますと共に、あたたかいご指導とご鞭撻を賜ります様、お願い申し上げます。

和と輪を求めて ―北陸信越支部の活動― その2

支部長　角野豊春

北陸・信越の五県(長野県、新潟県、富山県、石川県、福井県)に在住する機友会員で構成されている本支部は機友会第二番目の支部として創設以来丸四年を経過し、これまでに支部会則に則った種々の事業を展開して参りました。支部の創設期より第二回支部総会までの約二カ年間の活動概要と支部の紹介に付きましては、本ニュース第一号で紹介をさせて頂きました。本紙ではその後の活動の概要を紹介させて頂き、会員相互の和と輪の広がりに対する情報提供とさせて頂きます。

第二回支部総会とその後の二カ年間の活動概要を表にまとめて記載致しました。役員会と併せて開催してきました各県会員との懇談会も二巡目に入り、平成七年二月に新潟市で新潟県会員懇談会を開催いたしました。また、同年十一月には第十五回機友会定時総会への出席と併せて、支部会員全体を対象とした「びわこ・くさつ新キャンパス見学会」を開催し、大きく且つ活発に発展している母校を目の当たりに見聞し、広大なキャンパスに目を見張り無上の喜びと誇りを感じた一日でした。

第一号のニュースでも紹介致しま

北陸支部の活動概要　(平成6年9月～平成8年12月)

開催年月日	事業名称	開催場所	事業概要
平成 6年 9月17日(土)	第2回支部総会・懇親会	福井県福井市 福井ワシントンホテル	支部旗贈呈式 記念講演「びわこ・くさつキャンパスの現状と将来構想」 講師：酒井達雄教授(立命館大学) 懇親会：民謡歌手　田中慎子嬢出演
平成 7年 2月18日(土)	第6回支部役員会・新潟県会員懇談会	新潟県新潟市 万代シルバーホテル	母校の支援方法、支部行事について 懇親会：信濃川・屋台舟(貸切)内にて
平成 7年 7月 8日(土)	第4回特別会員懇談会	福井県福井市 福井ワシントンホテル	役員打合せ会(第7回役員会開催企画)を含む
平成 7年11月25日(土)	第7回役員会並びに新キャンパス見学会	立命館大学BKC	キャンパス、研究施設、木瓜原遺跡の見学 特別講演「立命館大学理工学部の現状と今後の展開」 講師：酒井達雄教授(立命館大学) 懇親会：京料理・たつのり
平成 7年11月26日(日)	機友会本部・支部合同役員会 第15回機友会定時総会	立命館大学BKC	
平成 8年 6月 1日(土)	第5回特別会員懇談会	福井県福井市 福井ワシントンホテル	役員打合せ会(第3回支部総会開催の企画)を含む
平成 8年10月19日(土)	第3回支部総会・懇親会	新潟県小木町 ごんざや旅館	記念講演1「びわこ・くさつキャンパスの現状と将来」 講師：酒井達雄教授(立命館大学) 記念講演2「世界の注目を集める北東アジア」 講師：大西　淳　氏(㈱ 大西　代表取締役社長) 支部間交流会
平成 8年10月20日(日)	佐渡観光の旅	佐渡島	大佐渡スカイラインコース：真野湾～尖閣湾～佐渡金山～大佐渡スカイライン～大佐渡高原白雲台～鉄砲鼻
平成 8年12月14日(土)	第6回特別会員懇談会	福井県福井市 福井ワシントンホテル	役員打合せ会(支部事業計画)を含む

注) 北陸支部創設～平成6年8月までの活動概要は本「立命館大学機友会ニュース」第1号(平成7年11月26日発行)をご覧下さい。

した特別会員もその数が増え、現在男性四名、女性五名の計九名となり、懇談会を通して母校の現状についての理解を深めて頂くと共に親睦の輪が広がってきております。最近では特別会員を通して子弟の母校への入学に付いての問合せもあり、母校支援の一役をかっております。

第三回支部総会は平成八年十月に新潟県佐渡島に会場を求め開催致しました。新潟県直江津市よりジェットホイール高速船で約一時間の遠隔地での開催でしたが、機友会本部会長・島田泰男様並びに母校教授酒井達雄先生のご臨席を賜り盛大な総会となりました。本支部総会では、機友会他支部との情報交換と支部間の密接な連携を目的として、各支部の支部長様にご参加のご招待を致しました。本趣旨にご賛同頂き、ご多忙中また遠路にも関わらず、奈良・和歌山支部より廣瀬全宏支部長様にご臨席を賜りました。また、ご都合によりご欠席の支部長様方より、文書により支部の近況をご報告頂きました。各支部独自の活動並びに問題点などを気楽に情報交換する絶好の機会でもあり、今後このような場が広がっていくことを期待したいと存じます。

支部総会の記念講演を二件頂きました。（表中の事業概要を参照下さい）。北陸信越支部からは日本海を隔てた隣国・中国、北朝鮮、ロシアは近くて遠い国の印象を持ち、難しい国情を抱える三国ですが、それら三国・トライアングルを一挙に巡るという史上希な視察旅行を実現された大西淳氏（株式会社　大西　代表取締役社長、本支部副支部長）に三国の現状と課題について、撮影されたビデオを交えてお話を頂きました。取分け、日頃目にすることの難しい北朝鮮の現状をビデオで拝見できたことは大きな収穫であり、参加者一同日本の現状と対比して、感慨もひとしおでした。

支部総会の翌日は佐渡観光の旅を企画しました。天候にも恵まれ、紅葉の美しい大佐渡スカイラインのドライブ、海岸線の美しい日本海そして佐渡金山跡の金の夢と参加者一同楽しくそして有意義な一日を過ごしました。なお、次回の第四回支部総会は二年後の平成十年秋に長野県で開催する予定で、再会を固く約束致しました。

取留めの無い活動概要となりましたが、これら活動は支部会員各位の御協力と御支援の賜物であり、また機友会本部役員並びに母校教職員各位の多大な御援助の賜物と深く感謝申し上げる次第です。今後も会員相互の和と輪の広がりを目指して活発な事業を展開して参りたいと考えております。また、機友会本部並びに他支部との連携を密にする為の企画を立案し、本支部が情報発信の基地としての役割も演じて行きたいと祈念しております。会員諸兄の御理解と御協力を切にお願いする次第であります。

躍動的な兵庫支部をめざして

機友会兵庫支部　支部長　大庫典雄

兵庫支部は、平成六年に誕生しました。本格的な活動を開始しようとした矢先に阪神・淡路大震災に見舞われました。その節には、各地の機友会の皆様に多大なご支援をいただきまして、誠にありがとうございました。被災地在住の校友も大勢災難に遭遇し、御苦労されましたが、二年経過し、元気で活躍しておりますから御安心ください。

九月末には阪神高速道路もようやく全面開通し、少しは活気も出てきたように思えますが、観光、商業、サービス産業などは、まだまだ復旧の足どりが進みません。どうか皆様、神戸へもどしどしお越しください。

第二回総会は、平成八年四月十五日（日）、神戸市北野の異人館通りにある「六甲荘」で盛大に開催しました。当日は、島田泰男機友会会長、田中道七教授、酒井達雄教授、藤澤福男校友会兵庫支部長を来賓として迎え、それぞれ貴重なご祝辞を賜り、母校の発展に勇気百倍いたしました。

第一部の総会は、活動方針として「会員相互の互恵と親睦をはかり、母校の隆盛を期す」「機友会兵庫支部活動の定着と発展」を掲げ、これらを具体化するために、最新の科学技術に関する講演会、見学会の実施、「兵庫支部だより」の発行、会員相互の情報交換の場としての交流会、親睦会の実施など機友会本部との連絡をとりながら実施していくことが確認されました。

第二部の記念講演は、田中道七教授の「立命館大学BKCの産官学研究交流の現状について」のテーマでお話を賜りました。産官学の技術者が大勢集まり、各々の研究センターで共同研究が推進されていることを拝聴し、うれしく、頼もしく、誇りに感じました。

第三部の懇親会は、古きよき時代の木造校舎を現代のBKC、T定規とCADなど、昔ばなしにも花が咲き、和気あいあいのうちに、総会を祝福しあいました。

今後は、BKCの発展に呼応し、「躍動的な兵庫支部」の実現に向かって努力していきたいと思っております。

校友の皆様も積極的なご協力、ご参加を熱望いたします。

教員だより

垣間見たイギリスの研究事情

立命館大学教授　田中武司

平成8年4月より9月までの6ヶ月間のサバティカル・リーブを戴いて、イギリスへの旅に出た。有意義に過ごすべしと、勇躍旅立ったが、4月20日過ぎまで、イギリスの大学はイースタ休暇で、学生の姿もない。しんと静まりかえり、なんとなく拍子抜けした感じであった。これから、イギリスの全てを見て、理解しようと勇んだわけだが、6ヶ月の短期間で見えるほど単純なものではない。ここでは、研究活動を通して感じ、見たことをそのまま記し、内容の至らない点、誤った点はお許し願いたい。

さて、私の留学したウオーリック大学は、ロンドンから北西に約110km離れたコベントリー市にある。イギリスのほぼ中央に位置し、自動車の都として知られている工業都市の郊外にある。内陸に位置するせいか、コベントリーの4月はまだ寒く、コートが手放せない状態であった。

ウオーリック大学は院生、学部生合わせて約一万四千名の総合大学で、イギリスで5位にランクされる優れた大学である。建物は全て現代的で、オックスフォードやケンブリッジ大学のような重々しさはない。物理学部、化学学部、生物科学部、計算機科学部などの他に、工学部があり、工学部の中に、機械、電気、土木、コンピュータなどの学科がある。ご他聞にもれず、どちらかといえば、理学色の強い大学である。

私の所属した研究室は、機械工学科の中のナノテクノロジー／マイクロエンジニアリングセンターにある。超微細工学での世界3大技術開発テーマの一つであるナノテクノロジーを研究するグループで、ボウエン教授がヘッドを努めている。夢とロマンは大きく、深いが、どちらかといえば、研究資金は少ないようである。写真1に示すように、古い精密測定器もあり、それほど大掛かり

な装置はない。手作りの小さな機器も多く、こじんまりとしている。

一方、機械工学科の中に、マニュファクチュアリンググループがある。写真2に示すように、4階建ての国際生産センターを建設し、研究プロジェクト毎にブースを持ち、大型装置を導入し、産学共同研究を活発に行なっている。世界から約三百社の参加を得ているとのことであった。

イギリスの大学の研究予算は非常に厳しい状況にある。ウオーリック大学の全収入に占める国家予算は44%で、残りは資金獲得活動から得ている。研究を活発に行なうには産業界からの支援を仰がねばならない。

産学共同研究で特に有名なクランフィールド大学では、国家予算は20%程度で、残りは研究契約、研究財団寄附、企業との共同研究などで賄なっていると、一教授が話していた。

特に、工学／技術でサイエンスを目指す研究グループは厳しい。日本では、サイエンスといえば、なんとなく物理、化学現象を中心とした科学を想像するが、イギリスにおけるサイエンスは少し捉えかたが、異なるのではなかろうか。工学／技術の中で、深い思考に基ずき、理論化、解析化、純粋学問化すること全般を指しているとも受け取れる。従来から、このようなサイエンスに主眼を置き、鋭意努力されてきたことは、それはそれで素晴らしいことであるが、応用面、実用面を若干軽んじてきた節が見られるのではなかろうか。大学工学部にいる研究者が工学／技術の中でのサイエンスに拘るあまり、イギリスの産業界からの支援が得られなくなったのかもしれない。それが延いてはイギリスの産業の衰退、起業心の減退に繋がっているのかもしれない。サイエンスを指向する一教授が、日本、韓国、香港、シンガポールなどのアジア諸国から、研究費を賄う現状を嘆かれておられたのも事実である。

私のお世話になった教授が、私との共同研究を行なう上で、応用化、実用化、具体化の一項目を入れることを望まれたのは強く印象に残っている。我々の研究も借りものの道具、機具、計算方法だけを使った、研究の演習のみに終わらないよう心がけたいものであり、世の中に初めて問う技術／産物を誇りたいものである。

木漏れ日の限りなく美しい国だけに、日出る光もまた美しい国であることを祈っている。

会員だより

古い写真

機械工学科元教員　関護雄

機友会最大の功労者のお一人は何と言っても藤谷先生でしょう。私も機友会発会のときに在籍していた筈ですが、何もかも藤谷先生がやって下さいましたので、実は機友会発会前後のことを何も覚えていません。

機友会会員名簿一九六一年度(仮に資料Aとします)によりますと、機友会会則の日付は昭和二十六年六月になっていますので一九五一年が発会でしょうか。

藤谷先生は、私が立命館専門学校に着任しましたときは、既に先任の先生で、年令も三年の先輩、その後長い間公私とも御指導をいただきました。特に、先生は学生、卒業生、後進の為によくお世話をなさいまして、頭の下がる思いが致しますが、それが「藤谷先生御退職記念文集立命館の風雪、昭和六十一年」(仮に資料B)にも結集しています。残念ながら平成元年に帰らぬ人となられましたが、五月四日の御自宅での葬儀に参集された参会者の長蛇の列は、先生御生前の御遺徳を示すものでした。

先生の古いお写真を探しているうち比較的、写真の保存のよい一枚を示します。

藤谷先生が中央でないのが残念ですが、これはおそらく昭和三十四年一月(一九五九年)で、後列右から藤谷、松田、村上、川辺、関、柴田、明石、笠井、阿波屋、寺石、前列右から福井、当時理工事務長、平盛、杉本、遠藤(敬称略)で、当時の機械科スタッフが写っています。中央の平盛さんの御定年退職時のもので、平盛氏は機械工場の管理指導者として功績のあった方です。この写真の二年後の資料Aによれば、明石、寺石先生が栄転され新しく、大南、田中先生、工場に尾本氏を迎えています。

私も資料Bなどによりますと、歴代総長、末川、武藤、細野、天野、谷岡各先生にお仕えし、さらに末川先生京大事件の頃は、私の兄がまさに法学部学生に在籍しておりましたので、昨今の機友会会員さんからみれば、歴史上の人物ないし化石となってしまいました。藤谷先生(大南先生御在学時、すでに先生であられた)と同時代の人間として、記録を残しておきたい所以です。

紅葉の信楽を訪ねて

「オアシス会」会長

(昭和三十年卒)小野健二

この秋十一月十六日、晴天に恵まれ信楽の老舗、料理旅館「小川亭」の送迎バスでBKC・コアステーション前を出発、途中あかく色付いた山々を眺めながら約四十分、愛敬のあるたぬきに迎えられ二時半頃、焼き物の里信楽へ到着。まず陶芸村に入り、見学用に残された登り窯の前で説明を聞く。信楽焼の歴史は古く約千二百年になるがたぬきの歴史は比較的新しく明治時代に入ってから縁起もの(他を抜く=たぬき)として作り始められ、信楽と云えばたぬきと云われる迄になったとのこと。えとに狸があればもっと広まったであろう・・・とは独り言。さて、この登り窯は傾斜面に設けられ、焚口(火袋)から始まって十段前後の部屋に区切られ、三昼夜予熱後七昼夜炊き続け、その間に使用する赤松の薪は約千五百束、やっと焼き上がっても本当に良いものはごく僅かだと云う。

炎と土の芸術、信楽焼。わび、さ

びのある逸品は作ろうと思っても出来るものではなく、神様の思し召し次第だと云われているが、この辺り何か人生と似たところがあり、厳しい環境の中で煤をかぶり灰をかぶりながらも、それを消化し自分のものにして始めて人に認められるものになるのだと思います。窯の内部などを見学の後、ここで一同狸と並んで記念写真におさまり、次の見学先へむかう。

百米ほど行くと、外装に信楽焼の特性タイルを利用した、信楽伝統産業会館がある。遥か天平時代の焼き物から近代のものまで、ひと目でその歩みがわかるようになっている。そのほかに常設展示場では＜陶&くらしのデザイン展95＞が開催されており、モダンな食器／食卓用品／インテリア用品などの展示があり、歴史のある信楽焼と対比して興味深いものがあった。以上で見学を終えいよいよ「小川亭」へ向かう。

新宮神社の前を通って約三百米、江戸末期建築の本館と新館が並ぶ「小川亭」の前にでる。すでに総会会場が新館に設定してあり、来賓の島田機友会会長を迎え定刻四時に総会スタート、当日の特別講演は「京都中小企業技術大賞を受賞して」と題して㈱ユーシン精機の小谷社長（昭和四十二年卒）にお話頂いた。プラスチック製品を射出成型後、金型より製品の取出しを行うロボットの開発並びに自動化、省力化への展開が評価され、平成七年度大賞に選ばれたものだそうで今後の益々の発展をお祈り申し上げます。

最後に別室に設けられた宴会場へ移り懇親会に入ったわけですが、二十二年卒の大先輩から現役の学生諸君まで非常に幅広い層に亘って、自己紹介や近状報告等など終始なごやかな雰囲気で楽しく信楽の休日を終えることが出来、非常に喜んでおります。

藤谷・酒井研究室同窓会も若い世代へリフレッシュして行こうと云うことから前回より憩いの場「オアシス会」として再スタートしたわけで、今後も皆様のご協力を得て楽しい企画を進めていきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

「ハンブルク」警察

（昭和二十二年卒）　山田元助

1．その日

西独「ハンブルグ」空港は、ごったがえしていた。忘れもしない一九八一年七月四日(土)午前の事である。六月二十日に日本をたって第二の人生として入社した大阪駅前第三ビルにある商社I社の社長に随行して、欧州各国を廻り、六月二十七日に帰国する社長を「パリ」の「ドゴール空港」で見送った後、私は単身、西独に滞在し業務を遂行していた。

その日、私は「マンチェスター」行きの直行便がないままに同空港十三時三十分発の「ルフト・ハンザ」で「デュッセルドルフ」に向かい、そこで英国航空に乗り換えて「マンチェスター」には十七時二十分到着の予定であった。私は国際間の移動は出来る限り相手会社が休日である土、日に行うことを基本「ルール」としていた。

I社に入社したのは此の三月、まだ入社後半年足らず、翌四月には台湾に出張し、今回は入社後第二回目の海外出張である。

私の荷物はいつしか大「トランク」二個と「アタッシュ・ケース」一個の計三個、全部の重量は四十kgを超えていた。見送りもないままに「タクシー」の運転手に「チップ」をはずんで、荷物の運搬を手伝ってもらい、空いていた「カート」を見つけて「やれ嬉しや」と一番重い大「トランク」を下に三段に重ねて、ホッと一息ついた。今回の出張の最後の目的地はこれから行く英国の「マンチェスター」あと一息で七月九日の帰国となる。

2．紛失

「ルフトハンザ」搭乗前に空港で一つすべき事があった。この場合、「デュッセルドルフ」を経由するが同地は単なる中継地に過ぎず、西独で買った土産の免税を受けるには、「チェック・イン」前に税関に行く必要があった。

案内所で税関の所在地を聞くと地下一階にあるとの事、やれやれと思いながら「カート」を押して空港端の閑散とした所にある「リフト」を探しあてた。旧式の「リフト」で「ドア」も手で引いて開けねばならぬ。一人と「カート」一台がやっと、はいれる狭い「リフト」の中で下降用の押「ボタン」を押す。下降開始、視線を「カート」上の荷物におとした瞬間私は「あっ」と叫んだ。

一番上に乗せてあった愛用の「アタッシュケース」がない！。

「しまった。落としたのか、どうなったのか。」瞬間とにかく戻らねばと上昇用の押「ボタン」を押すが「リフト」は目的の地下迄下降を続けた。そして再びもとの「フロア」に戻って見渡したが場末の「リフト」近くには人影もなく「シーン」と静まりかえっていた。

大「トランク」二個になった「カート」を押しながら、「はて」どうしたのかと考える。「ケース」の中に何が、はいっていたか。ともすれば旅行中にありがちな放心状態に備えて直接旅行に必要な航空券、現金、「トラベラー・チェック」や「パスポート」は身につけて一切入れていないが、社長が特別な顧客用にと購入し、私が預かった「パリ」以外では入手し難い「ブランド物」何種類かと、機内で頭の整理に読もうとしていれた「マンチェスター」での交渉用の書類がはいっていた。何んにしても「ぼんやり」丸出しの大「チョンボ」である。

会社の諒解を得て、英国での予定を延期して「パリ」に引返すべきか、英国を予定通りとし「パリ」に再度行くべきか。むしろ金銭だけなら金の問題として私の負担で解決できるが、会社や顧客に迷惑をかけ私自身への信頼感の低下も免れない。折角成功裡に進んできた今回の出張も最終段階でこの始末。やはり年なのだろうかと、「くやしさ」と残念さで暫く、意気消沈した。

気がせくままに最寄りの航空会社の「カウンター」をのぞきこむ。事情を説明し、こんな場合のとるべき措置を聞いた。「貴方はどこの「フライト」を利用するのか。」「ルフトハンザ」？　ああ、それならば当社の「フライト」でもないし関係もない。」と冷やかな返事が返って来た。その「やりとり」を見ていた通りすがりの白人が私に「インフォメーション」に行ったらどうか、と「アドバイス」してくれた。

3．当惑

それにしても何時の間になくしたのだろう。落としたのなら音で気がつくはずだし、税関行きの「リフト」を探していて眼が手許になかった。自分が押している「カート」に積んだ「アタッシュ・ケース」の紛失が気がつかぬとは何たることか。そうだ、「ひも」でしばって置くべきだった。いや、いやここは治安のよい西独ではないか。しかし、「この頃は、西独への出稼ぎ外人が多くなって事件が多くなった」との昨日会った「ドイツ」人の「ぐち」を思い出す。そうだ、空港は国際空間でその国ズバリではない。

D染工在職当時、旧「マニラ」空港での話を思い出す。出迎えや見物か、わけもわからぬ人々が一杯にごったがえす旧「マニラ」空港で、大「カバン」を扱っている間に、一寸した隙に横に置いた機内客室持ちこみの袋を持って行かれた事がある。「マニラ」にあるG社のY社長への土産の彼が最も好物とする日本製の「マロングラッセ」であった。「トランク」に入れて航空会社に預けると一万米の高空中での低温度で風味をそこなうおそれがあり、機内客室に持ち込み大切に扱っていた「しろもの」であった。私は、その時、持ち去って逃げる男の追跡を断念した。追跡の隙に手許の大「トランク」がやられる恐れがあったからである。その時、私は「マニラ」の「ドル・コーナー」で在住「フィリピン人」が入手しにくい特殊な外国産のお菓子を買ってお土産とした。出迎えのF氏がY社長にしゃべったらしく、Y財閥の「ボス」であり、従業員から「キャプテン」の愛称で親しまれ

ているY社長は「フィリピン人」の非行を詫び、私も「『フィリピン』の方が、どこかで美味しいと言って喜んでたべていてくれれば・・・」と格好つけて対応したものだが。

4．「インフォメーション」

「インフォメーション」に行くと男性の年輩の「ドイツ」人係員が熱心に大きい声で電話中であった。電話が終わるのを待っていると、「ドイツ」語の中にYAMADAという名が盛んに登場してくる。暫く聞いていて私はYAMADAという「ネームカード」が貼られている「ケース」が話題になっている事に気づき、とたんに思わず、「私はそのYAMADAです」と係員に叫んでいた。

係員は驚いて電話を中断して、私の手短な話を聞き、うなずくと「ウインク」して又電話を続けた。

5．「ポリツアイ・ハンブルグ」

電話を終えた係員は、にっこり笑い、私服で張りこみ中の刑事が、貴方の「カート」から「アタッシュ・ケース」を盗む所を見て追跡、格闘の上現行犯で逮捕した。電話中貴方の話を聞いたので担当刑事に言った所、担当の刑事がその「アタッシュ・ケース」を持って、これから「インフォメーション」に行くとの事である、と言った。

ああ、よかった。有難い。正に「地獄の中の仏」とはこの事か。私は神仏の加護としか言い様のないこの幸運に感謝した。

暫くすると背の高い「ドイツ」人が私の「アタッシュ・ケース」を持って現れ私に気がつくと白い歯を見せた。内容を説明し、言われるままに私は持っていた鍵で開け異常のない事を確認した。合鍵と私の「パスポート」や内容の説明で私が持ち主である事を確認した刑事は、早速調書を作成し要旨を説明して署名を求めた。私はその調書の末尾に署名したのであるが、警察の調書に関係した事は生まれて以来初めての事であった。「フライト」の出発時刻が迫っていた私はこの刑事に帰国後改めて礼状を差し上げたいからとお願いし、当然の職務を遂行したまでと遠慮する彼から名刺をもらった。

名刺にはPOLIZEI　HAMBURG（「ハンブルグ」警察）特殊犯罪担当と印刷してあり、その下にP刑事の名が記入されていた。

おかげで、私は改めて税関に行き手続きをすませ、「ルフトハンザ」の「カウンター」で「チェック・イン」し、予定通り「ハンブルグ」13：30発のLH914に搭乗ができ、最終目的地の「マンチェスター」での交渉も順調にまとまって帰国する事ができた。

P刑事には帰国後改めて礼状を出したが、三ヶ月後の同年十月から十一月に欧州に出張する機会があったので、私はP刑事に贈呈すべく日本から「ガラスケース」入りの日本人形を大切に携行した。P刑事の勤務と私の「ハンブルク」滞在日程がかみ合わず、再会出来ないので、「ハンブルク」在住の「ドイツ人」M夫人に「手渡し」を依頼した。

P刑事に会ったM夫人の話では、「犯人は西独へ出稼ぎに来た男女で、女が私に話しかけ、一そう言えば、JALの「カウンター」の場所はどこか、と話しかけて来た中年の女性が居た。一私の注意がその方にそれている間に、男が眼のつけていた一番上の「アタッシュ・ケース」を素早くとって逃げた」との事であった。（帰国後、P刑事から日本人形についての丁重な礼状を頂いた。）

6．恩人

それにしても、張り込み中の刑事がいて、いちはやく犯人を逮捕した事、中でも「インフォメーション」に行った「タイミング」のよさ、離陸前のきわめて限られた時間内に事件が解決、手続きも完了し、被害者が予定通り空港を出発できた様な事は全く稀有との事である。古風かも知れないが、これも「ご先祖さん」が、何時どこで、とられたかも判らない程「ぼんやり」していた私を加護して下さったお陰だと確信した。

黙々として日夜治安の確保に努力されている警察関係の人々の活動に改めて感謝したい。

この「ハンブルク」警察のP刑事は、「職務を忠実に遂行しただけ」と言っていたが、私にとって彼は終生忘れることの出来ない印象深い人であり、恩人である。

三瓶・小屋原　五十二年ぶりの再会旅行

二十二機会　山田元助

「発端」

平成八年四月、神戸から来た沼田敏彦君を迎えて、島田泰男、室野英一、山田元助の四名（何れも昭和二十二年卒業の二十二機会員）が京都で会食した時、沼田君から三瓶・小屋原旅行の提案があり、一同大賛成で会員を誘って、再訪問することにしました。

沼田君は戦後何回か三瓶付近に行ったが、当時の事をよく知る人に会える機会がなかったとの事でした。そして旧知の人々とお会いする事を目標として、私がこの旅行のお世話をさせていただく事になりました。

「小屋原の思い出」

当時の事については、藤谷先生御退職記念文集「立命館の風雪」（昭和六十一年六月発行）に、「激動の機械科学生時代」として私は次の様に書いています。

「勤労動員」

勤労動員は初期は農村や飛行場の土木関係へ、後には軍需工場へ行った。戦局の進展に伴い国は銃後の学徒の労働力を必要とした。その思い出を若干述べたい。

昭和十九年六月、機械科同期一組と二組で約百名が島根県の三瓶山（一一二六米）の山麓、小屋原村へ勤労動員された。かなりの山奥で自然の温泉があり、景勝の地であった。

人手不足になやむ山村の農家は私どもを歓迎し食糧難の時代であったが、我々に対して心尽くしの「もてなし」をして下さった。

我々機械科生は、毎日、今でいう公民館を宿舎に作業場へ出かけたが、皆の勤務状況を配属将校が見に来たりするのも戦時下らしかった。私は、勤労先のある家庭で人目にわかる程特別な歓待をうけ、帰りには当時貴重品の蜂蜜、小豆、もち米、「わさび」などのお土産を頂いた。後に打ち明け話を聞くと出征中のそこの子息と私が、そっくりで他人と思えなかったとの事であった。宿舎の近くに自然の温泉をとりいれた公営の無料の温泉小屋があり、我々もよく利用したが、男女混浴になれた村の女性達がはいってくると逃げ出す純真な学生もいた。激しい労働であったが、同期の学生がお互いに理解し団結を固めた思い出の場であった。

村の人々と相談して或る一夜、公民館で地元の人々と演芸会をした。村人による本場の安来節に興じたり、私たちも「かくし芸」をした。

当時、国民学校（小学校）四年の唱歌に「機械」という歌があって、子供達が合唱してくれた。美しい自然に恵まれた山村で、夜遅くまで村人達と楽しい一夜を過ごしたが、それは風雲急な戦時下にあって、夜のとばりにつつまれた山村にかすかな燈がもれ、楽しい歌声が美しい星空の下を流れてくる一つの風物詩であった。

京都へ帰る日、何時迄も手を振って見送って下さった村人達の姿が今でも思いだされる。

「五十二年間の壁」

当時、小屋原は島根県安濃郡佐比賣村小屋原でしたが、その後行政区画がどの様になっているのかも判らず、先ず、この五十二年間の壁をどう破るかが私の課題でした。

そこで小屋原の皆さんと接触する前に調査をする事にし、新しく発行された機友会会員名簿から次の基準で選び調査をお願いすることにしました。

①島根県在住で、同一企業に最大多数の会員が勤務する会社をさがす。

②その会社の最先輩の方にお願いする。

この基準でお願いすることにしたのは、三菱農機（機友会員五名）で最先輩は昭和三十五年に卒業された川上民夫さんで、書状で調査をお願いしました所快諾して下さいました。

川上さんは大田市役所と連絡をとり商工観光課と連絡を取り、適切な情報や資料を送って下さり、小屋原は現在、大田市三瓶町小屋原になっている事がわかりました。

多数の資料の中に居住者名が明示の詳細な小屋原の地図があり、その中に木村稔さんの名を発見して大喜びしました。

木村家も前述のご家族同様、私を可愛がって下さったご家族で、当時京都に帰る時、全家族でとられた記念写真をいただいた程で、私はその写真を大切に保存していました。

木村稔さんに私達の希望を書いた書状を差し上げました所、早速小屋原から滋賀県草津市の私に電話があり、「第二の故郷だと思って来て下さい。お待ちしています。」と温かいお返事を下さり、大感激しました。

こうして五十二年間の壁が破れ、小屋原の皆さんとのなつかしい交流が始まり、訪問時期は農繁期の終わった十一月十日前後と決まりました。

「旅行計画発表と参加者」

平成八年五月、二十二機会全員に五十二年ぶりに小屋原の人々と再会することを核とする旅行計画をたて参加希望者を募った所、

(東京)横井健
(滋賀)青木一夫、山田元助
(京都)小井実、島田泰男、中西弘、室野英一
(大阪)久世邦之、吉見陽文
(兵庫)沼田敏彦
(岡山)後藤巍
(広島)新田禮二

の十二名が参加することになりました。

「再会旅行」

木村稔さんを通じて小屋原自治会と充分な打ち合わせを重ね、大田市商工観光課、日本旅行瀬田旅行センター、更に川上俊江さんのご協力を得て周到な旅行計画をたて、私達は、平成八年十一月九日(土)JR大田市駅で川上俊江さん、恩田好枝さんの出迎えを受け、参加者全員集合地の大田市駅では、松尾小屋原自治会長始め関係者やRITSの小旗をもった本学のOBの石橋信幸さん、木村昌晴さん(太田市在住)更に大田市商工観光課企業振興係長の松村浩さん(本学OB)が歓迎して下さいました。又TVを含む報道陣が私達を囲みました。

私達は、出迎えの人々と共に小屋原温泉の送迎バスに乗りこみ、松村さんのガイドでなつかしい小屋原に向かい、投宿後、美しい国立公園三瓶山や近代設備の整った三瓶自然館に行きました。自然館では瀬上康治館長自らの丁重な案内をうけ、又翌日は小屋原自治会長始め有志の方々と有名な大森の町並みや、石見銀山を森岡勲さんの熱心な案内で見ましたが、本稿では五十二年ぶりに再会した懇親会にしぼりたいと思います。

「懇親会序幕」

十一月九日夕刻の懇親会が始まる前、今年八十七才になる木村智子さんの訪問をうけました。既述の木村稔さんや川上俊江さんのご母堂で美しく上品な方で当時の事をよく知っている方で、五十二年ぶりの再会でした。いろいろのお話の後、「年がゆくと友達が減ってゆくのが淋しい。」との事に、私が「今日は十二人の友達が来ました。」と申しますと大笑いされました。高齢の中をお越し頂き誠に有り難いことでした。何時迄もご健勝であることをお祈りする次第です。

懇親会場は昔なつかしい公民館で私達一行は満場の拍手で迎えられ、遂に感激の五十二年ぶりの再会の時が来ました。

「懇親会」

懇親会は予定通り午後六時半から、私との小屋原側「ホットライン」をつとめて下さった木村稔さんの司会で始まりました。私と松尾小屋原自治会長との挨拶交換後、私達一行を代表して島田泰男君が松尾自治会長に、二十二機会同期の書家、日展会友の村山五周先生(村山多禾生君)揮ゴウの書額を自治会に贈り、又青木一夫君と共に、小屋原側出席者全員に私達の記念品を贈呈しました。

又自治会から松尾自治会長を通じて記念品を、市の松村浩さんから市議会議長からの記念品を、更に農家の方から当時の私達の勤労を感謝するとして自家特産の「ゆず」を頂戴しました。記念品の相互の贈呈で和やかな雰囲気の中、機到れりとして会場に送って下さった大南総長からの祝電を披露させて頂きましたが、思い出の公民館は、五十二年ぶりの再会に感激一汐の参加者一同の大拍手で沸きかえりました。祝電は次の様な素晴らしい内容でした。

お祝い
お届け台紙名　「絢爛」
お届け日　十一月九日午前
二十二機会・小屋原自治会
交流の集い　様

二十二機会の皆さん、小屋原の皆さん　この度は懐かしの再会誠におめでとうございます。五十年ぶりの再会に感慨もひとしおと拝察します。昭和十九年の夏に本学学生が水害復旧のため、御当地におもむいたよし、学内の古い文章にも記載されています。我が国の戦後の復興と発展は実にめざましいものがありますが、これも当時の厳しい体験を胸にきざみ、各地で多くの国民が忍耐強く誠実に努力を重ねたことによるものと存じます。この度の心あたたまる交流会企画に深甚なる敬意を表するとともに、ご参会の皆様方のますますのご健勝とご多幸をお祈り申しあげます。

学校法人立命館　総長・学長
大南　正瑛

思いがけず総長からの祝電を頂き立命館のOBとして誠に嬉しく、小屋原の皆様も大喜びして下さいました。そこで、小井実君の音頭で出席者一同声高らかに乾杯し五十二年の再会を喜びあいました。

この会を祝ってつかれた紅白の「おもち」が配られ、当時のことをよく知る八十歳以上の高齢者も多数出席され、この会のために里帰りして出席した女性もかなりあり、出席者全員が十数台のスキヤキ台を中心に美酒を酌みかわし、食事を楽しみ、当時のことを楽しく語りあい、興至って地元の「安来節」や「どじょうすくい」などが飛び出し、素晴らしい演藝や踊り、民謡が披露され誠に楽しい五十二年ぶりの再会でした。

私は当時国民学校(小学校)の皆さんと仲良くしていたおかげで、今は還暦前後になられた方々が、私が送った当時の貴重な写真を持ってきて「これが私です。」と自己紹介しながら私との再会を喜んで下さり嬉しい事でした。当夜もTVを含む報道陣の取材があいつぎ、心温まる「ニュース」として歓迎され、これらの記事と写真は十一月十日、中国新聞で、十一月十二日は山陰中央新報で大きく報道されました。

当夜出席の松村浩さんから、帰宅後いただいた手紙に「当夜の地元小屋原の皆さんの熱烈な歓迎に、後輩の私も感動しました。皆さんも五十二年前を思い出されたことと思います。激動の昭和を生き抜かれ、平成の世で「かくしゃく」としてご活躍されておられる二十二機会の皆様を拝見し私も「立命館」の名を汚さぬよう頑張ります」と書かれていました。沼田敏彦君担当の全員の記念撮影が、「お開き」の前にありましたが、全員がすっかり意気投合していてその賑やかな事、余りにも盛り上がりのため、撮影に一苦労があった様です。バンザイ三唱後、予定通り午後九時半お開きとなり、我々十二名がそれぞれ「ユーモア」一杯の挨拶をして公民館を整然と退場しましたが、満場の拍手「かっさい」をあびました。

「むすび」

その夜遅く、私は近代化された小屋原温泉熊谷旅館の建物の中を通って昔ながらの湯治場のたたずまいを残す入浴施設に行きました。湯治は全部で四つ、それぞれ個室に仕切られており、その内三つが開放されています。泉源の温度は三八.二度とかで偶然一緒になった新田禮二君と二人で、かすかな鉱物臭が漂う中、食塩炭酸泉の泡が体中を包んでくれる湯船につかりながら、話合ったり思索にふけったりして、素朴な温泉の情緒を長湯で心ゆくまで楽しみました。

それにしても今回の訪問は「ベストタイム」でした。思い出の深い公民館は老朽化したため、近い将来建て替える計画があるとの事。

今回、自治会に贈呈した書は、村山五周先生が小屋原にふさわしいものをと芭蕉の句の中から特に選んだものです。

「梅が香に　のつと日の出る
山路かな」

「早春の明け方、野梅の香に足をと

どめると、山の尾根から、のつと朝日が上る」との意味ですが、何時でも公民館に飾れる様に、おめでたい事なので、特に朱系統の額を選んで額装しあります。

どの様な公民館が出来ても建物に見事に調和して飾っていただけると思います。

又、今回の懇親会出席の皆さんに贈呈した記念品はこの日この為に特注して焼いた「マグカップ」でそれには次の様な字句が刻まれています。

小屋原の皆さんが、この「マグカップ」で飲物を飲まれる時、五十二年ぶりの再会で、楽しかった懇親会の事を思い出していただければと、私達は念願しているのです。

小屋原訪問記念

美しい大自然に囲まれた
三瓶山の人情豊かな
小屋原の皆様と
五十二年ぶりに再会できた
喜びを記念して。

平成八年　秋

立命館大学二十二機会
青木　小井　久世
後藤　島田　中西
新田　沼田　室野
山田　横井　吉見
（有志十二名）

父が考えたのは学徒動員で労働するよりも、技術を身に付けて国のために尽くす(?)方を取ったのではないかと思います。其の養成所は寝屋川に有りました。そこで終戦を迎えました。それからトヨタ自動車、今は豊田市に成っていますが昔はころもという町に有りました。其時親戚がトヨタ自動車に勤めて居たので、父がその人を頼って入社させてくれました。其時幸いにも車の部品作りで無く、色々の治具を作る工場でした。

次に立命の機械科に入ったのは、兄が立命の電気科を卒業するので私に機械の事をして来たのだから機械科へ入ったらと言う事が切っ掛けで入学させてもらいました。今京都新聞に「防人の詩」と言う記事が掲載されています。これを見て、今時代の流れは急速に成って居ます。学校教育も尋常小学校から国民学校、小学校から中学、高校、大学と急速に変わって居ます。話しはもどりますが養成所は寝屋川に有り大阪城が良く見えて居ました。終戦前はB29が編隊で大阪市内へ行くのが手に取る様に見えてた。終戦まぎわは艦載機がとんで来て、近くに工兵公署が有るので何回もかくれたことが有ります。其様に二十六年卒、二十七年卒の仲間は戦時中、戦後、色々互いにちがった道を歩んで来た集まりですので、だれが言うことなく「ぼんくら会」と名前が付いてしまい、今でも交流が続いています。

以上乱筆乱文ですが、読んで頂いて二十五年卒業の一人にこんな人も居ると言うことを機友会ニュースの一部に出して頂けたら幸せだと思っています。以上、上記のことでわからない部分があればお電話下さい。

平成八年七月三日
京都府八幡市八幡舞台三四ー八
電話075—982—0321

「我が人生を顧みて」

山本竹次郎

拝啓、いつもお世話に成ります。機友会に付いて、自分成りに少しお話をさせて戴きます。自分が中学二年生の時、今は亡き父が厚生省大阪機械技術員養成所へ行く様、手続きしてくれました。入学の時中学卒業見込みで手続きしてくれました(其時は四年制でした)。

事務局だより

機友会草創期に関する記事ご寄稿を請う

立命館大学機友会事務局

昨年十一月二十六日開催の立命館大学機友会・第十五回定時総会の折に「機友会ニュース」が創刊されて以来、会員各位から読後感や記事に対する要望など多くのご意見を頂いた。また、本学あるいは本会の歴史の上で貴重な数多くの写真もご提供頂いた。これらの内、元機械工学科教授・関護雄先生と昭和二十七年卒・山本竹次郎氏のお二人から同一の写真をお送り頂きました。大変貴重で画質も申し分ないものであり、これを本誌に掲載させていただきます。

この写真は機友会草創期の多くの会員諸氏にとって、懐かしく忘れがたい当時をそのまま物語っているのではないかと思われます。この点について事務局で検討させて頂いた結果、この写真の頃の機械工学科(またはその前身)の状況や機友会創設の経緯、さらにこの頃の機友会運営形態などに関し、広く会員諸氏のご寄稿をお願いし、本会の発足・変遷・確立の経過にまつわる史実を蓄積させて頂くことになりました。

つきましては、任意用紙に原稿をおまとめ頂き、事務局宛にお寄せ下さいますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。紙数や記事形式については特に制限を設けませんので、奮ってご寄稿を賜りますよう念願する次第であります。

なお、貴重な原稿をお送り頂きながら頁数の都合上、次号に掲載させていただくようなこともあり得ますこと、予め御高承を賜りますよう宜しくお願い申しあげます。

Rits

立命館大学機友会事務局連絡先
〒五二五—七七
滋賀県草津市野路東一丁目一—一
立命館大学理工学部機械工学科内
電話　〇七七五—六一—二六六四
FAX　〇七七五—六一—二六六五